

『白帝城』 李白

今も人の心を捉えてはなさない李白の詩

白帝城は三峡の一つの瞿塘峡という峡谷の所にある名所で、漢の時代に公孫述という將軍が、此処に砦を築き、「我こそは白帝（西の帝王）なり」と号したところから、その名の由来となった。この詩は李白が長江を下る旅に出た時、一夜明けた早朝、白帝城を発ってより江陵までを、舟で下ったことを詠んだものである。

この詩の制作時期を知る上において、李白が生涯をとおして、この三峡を二度下っていることに注目したい。一度

は二十五歳の時、大志を抱いて故郷の蜀を出た時。もう一度は安史の乱にまき込まれ夜郎に流される途中、白帝城まで来たところで、大赦の知らせを聞いて江陵へと引き返した五十九歳の時である。この詩が作られた時期は何れかであろうが現存する一千余首の李白の詩の大半が、いつ頃のものであるか定かでない。杜甫のように、世相と年代を追う詩とは好対照をなしているの、制作時期の決め手となる確実な証拠はない。しかしこの詩の内容は明るい希望と躍動感あふれる唐代七絶の随一と評され、李白の最高傑作として今に親しまれている。

希望に満ちた李白のうた

白帝城を あげがた たった
眼前に ひろがる あさやけ雲
江陵までの一千里
一日にして下ってしまおう
兩岸には
なきつづける猿のこえ
軽い舟が
あれよあれよというまに
万と重なる
山をすぎさった



朝辭白帝彩雲間
千里江陵一日還
兩岸猿聲啼不住
輕舟已過萬重山

李白

勇躍たる李白！そして伝説に彩られた死

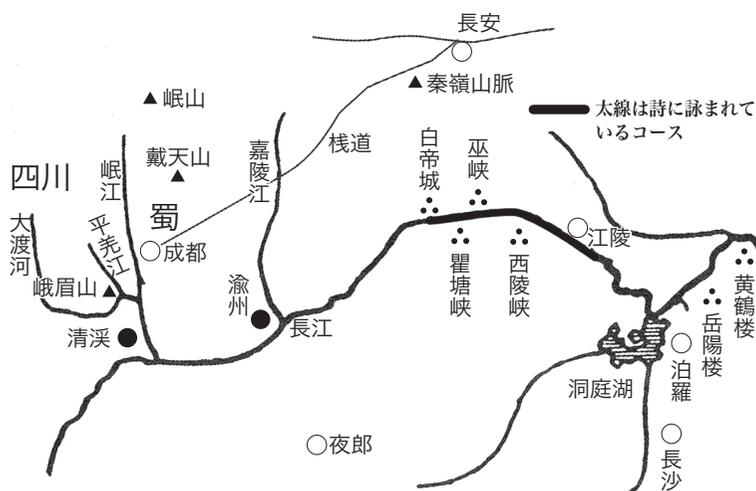
白帝城は現在の四川省奉節県にあった古城で、この下流がいわゆる長江の「三峡」である。やがて白帝城を発った李白の乗る舟より眼前に広がる中国第一の大河、長江。実におびただしい人々が、さまざま思いを胸にこの河を下り或いは上ったことであろう。李白も又、前途に希望をもち、はやる心のままに江陵へと下っていった。

その後の彼の生涯を見ると、文字どおり旅人としてはじまり、旅人として終わったと言えようが、どの場所にも定住することなく、その足跡は中国全土に及んでいる。白帝城を発ってより数えること十七年、長い放浪生活の後、やがて李白の名声は高まり、四十二歳にして長安の宮廷に召されることとなった。のち玄宗の子永王が安禄山討伐の兵を起こした時、李白は戦火の中に捕らえられた。その六十二年の生涯はまさに波瀾万丈の窮みといえよう。生涯努力し続けた詩作において唐代中期に一条の光芒を放って消えた流星と呼んだほうが相応しいかもしれない。その生涯は伝説に彩られ、その死すら例外ではない。ある晩、醉眼朦朧とした李白は江上に浮かぶ舟の上で月を愛でていた。李白はおもむろに立ち上がり、川面に写った月を捉えようとして水中に身をおどらせたというのである。この死は民衆で囁かれた俗説にすぎないが、李白の死にはもっともふさわしいと後世の人が与えたもので

あろう。李白の詩の魅力は雄大で自由な精神ののびやかさであるが、その絶句のうまさは誰をもってしても及ばないとさえ言われている。

蜀から都に上る行路は水と陸

李白二十五歳にして蜀の地をあとにし諸国遍歴の旅に出ることを決意した。この時李白の初志は、少年時代から蓄えた知識と、



天賦の文学的才能を発揮するところとして、いつか唐朝において活躍したいと考えていた。蜀から中央へ出るには当時、水、陸の両路があった。陸路は北に山越えの道をとれば真つすぐ都長安につながり、五百里ほどと距離にすればず

い分近道であるが、秦嶺山脈の難所中の難所、蜀の栈道を越えなければならぬ。

「噫呼、危ういかな高きかな 蜀道の難きは青天に上るより難し」にはじまる李白の長編詩によって、その困難をおしはかることができよう。剣のように 鋭くそそり立つ、断崖や各所にゆらゆらと揺れる危うげな掛け橋。『谷底を見れば目がくらみ頭がくらくらししてゾツとする』と。結局李白は険しい陸路を避けて蜀を流れる平羌江から岷江へと下り、長江へ合流する水路をとった。

二つの疑問

ひとつは千里の江陵を一日で下り切れるかという疑問であるが、唐代の千里は今の五〇〇キロ前後である。夜間航行は不可能であり、三峽を過ぎると川幅も広く、流速も落ちるので一日で下り切るといふのは事実無理であったろう。一日にして下るといふ伝承は当時よく知られていたもので、昔の民謡や詩にも、「朝に白帝を発して暮れには陵」という句が見られるように、一種の言いならわしになっていたようである。やはり李白はスピード感を表現する技法として用いたものと思われる。もう一つの疑問点は「還」という字に対する見方として、李白が江陵から長江を上ってきて引き返す時に作ったのでは、とする疑問である。つまり罪を許されてすぐ引き返したと解釈すれば、李白の死

の三年前の晩年の作ということになる。しかし「還」というのは必ずしも「かえる」の意ではなく、江陵と白帝城との間を往復する舟便の帰り舟であり、又間・還・山（上平声十五剛）を使った押韻の作法と考えれば理解しやすい。いずれにしても李白の判明した生涯のうちで、確実にここを通ったとなし得るのは二度であることを示すに過ぎず、「還」の一字でどちらに決まるといような性質のものではない。

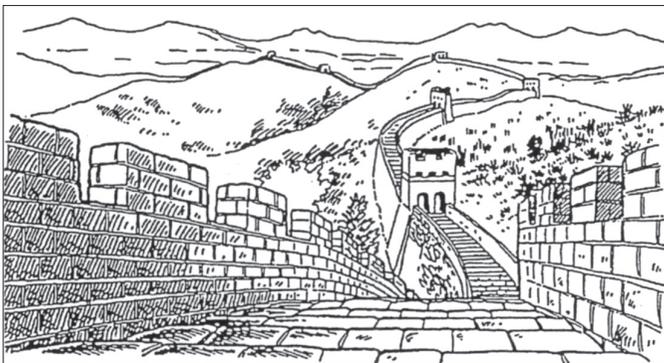
詩全体の希望感、スピード感、力量感からして、二十五歳の若き李白が大志を抱いて故郷をあとにした「峨眉山月」に続いて作られた詩であると解したい。

研究と鑑賞

この詩の技巧は一句目の色彩工夫にある。白―彩（赤）の対応が美しく、白帝城の周辺は緑の山と青い川の流れである。白帝城あたりの朝焼けの雲とくれば、連想されるのは朝雲暮雨で知られる巫山の故事である。その伝説とは、戦国時代楚の襄王（紀元前二九八―二六三）が巫山に遊んだ時、昼寝をした時の夢の話であるが、艶やかな女が現れるやうに参りましたの。どうぞ一緒に寝させて下さいな』といて王のそばにすり寄ってきた。王はしばし寢床を同じくして寵愛したが、やがて別れの時がくると『私はこれ

から険しい峰に戻って朝は雲となって山にかかり、夕べは雨となって貴方さまをお慕いしております』といて、何方ともなく去っていった。不思議な夢から醒めた王が、翌朝、巫山の方を眺めてみると、夢の中の女が言ったとおり美しい光をうけた朝雲がただよっていた。この故事から男女の密会や情交を「巫山の夢」というようになった。第二句は千里と一日の対応がうまく、第三句は兩岸の猿の鳴きやまないごく短い時間をいうのであるが、第一句の視覚を

通した表現に対して第三句は聴覚に訴えた技法を用いている。「峨眉山月」の「月」が故郷に残してきた恋人を暗示するよう、「猿声」は李白を引き止めようとする恋人の悲痛な叫びを暗示していると考えられよう。六朝時代宋の劉義慶が著した『世説新語』には次のような故事が載っている。晋の武将、桓温が三峡を下っている時、家来の一人が子猿を捕まえてきた。母猿は悲しそうに鳴きながら、岸づたいに百余里も追いつけ、



そして、ついに舟に飛び移ることができたがその途端に息が絶えた。その腹を裂いてみると腸がはずたにちぎれていた。「断腸」の語源として引かれる故事だが、李白はこれも意識していたのかもしれない。第四句では作者が軽舟に乗って重なる山を一気に下ってゆくのである。スピード感溢れる描写で、急流を下る爽快感が伝わってくる。「軽」と「重」の対比。「千」・「二」・「両」(二)・「万」という数詞が巧みに配置されている点も味わいとして見逃せない。